

当ファンドの仕組みは次の通りです。

商品分類	追加型投信／国内／株式	
信託期間	無期限（2000年5月2日設定）	
運用方針	主として、バリューマザーファンド受益証券およびグロースマザーファンド受益証券に投資し、東証株価指数（TOPIX）をベンチマークとして、中長期的に同指数を上回る投資成果をめざして運用を行います。各マザーファンド受益証券への投資配分は50%ずつを基本とし、日本経済のファンダメンタルズ分析、各種テクニカル分析などを基に当社のブレンドファンド運用会議にて決定します。マザーファンド受益証券の組入比率は原則として高位を維持することとします。	
主要運用対象	ベビーマザーファンド	バリューマザーファンド受益証券およびグロースマザーファンド受益証券を主要投資対象とします。このほか、当ファンドで直接投資することがあります。
	グロースマザーファンド	わが国の金融商品取引所に上場されている株式および店頭登録株式を主要投資対象とします。
	バリューマザーファンド	わが国の金融商品取引所に上場されている株式および店頭登録株式を主要投資対象とします。
主な組入制限	ベビーマザーファンド	株式への実質投資割合に制限を設けません。外貨建資産への投資は行いません。
	グロースマザーファンド	株式への投資割合に制限を設けません。外貨建資産への投資は行いません。
	バリューマザーファンド	株式への投資割合に制限を設けません。外貨建資産への投資は行いません。
分配方針	経費等控除後の配当等収益および売買益（評価益を含みます。）等の全額を分配対象額とし、分配金額は、基準価額水準、市況動向等を勘案して、委託会社が決定します。ただし、分配対象収益が少額の場合には、分配を行わないことがあります。	

※当ファンドは、課税上、株式投資信託として取り扱われます。
 ※公募株式投資信託は税法上、「NISA（少額投資非課税制度）およびジュニアNISA（未成年者少額投資非課税制度）」の適用対象です。
 詳しくは販売会社にお問い合わせください。

運用報告書（全体版）

日本株スタイルセレクトオープン

愛称：ビッグ・ウィング・ワン

三菱UFJ
スタイルセレクト・
ブレンドファンド

愛称：潮流

第44期（決算日：2022年9月12日）

受益者のみなさまへ

平素は格別のご愛顧を賜り厚く御礼申し上げます。
 さて、お手持ちの「三菱UFJスタイルセレクト・ブレンドファンド」は、去る9月12日に第44期の決算を行いました。ここに謹んで運用状況をご報告申し上げます。
 今後とも引き続きお引き立て賜りますようお願い申し上げます。



三菱UFJ国際投信

東京都千代田区有楽町一丁目12番1号
 ホームページ <https://www.am.mufg.jp/>

当運用報告書に関するお問い合わせ先

お客さま専用
フリーダイヤル

0120-151034

（受付時間：営業日の9:00～17:00、
土・日・祝日・12月31日～1月3日を除く）

お客さまのお取引内容につきましては、お取扱いの販売会社にお尋ねください。

本資料の表記にあたって

- ・原則として、各表の数量、金額の単位未満は切捨て、比率は四捨五入で表記しておりますので、表中の個々の数字の合計が合計欄の値とは一致しないことがあります。ただし、単位未満の数値については小数を表記する場合があります。
- ・一印は組入れまたは売買がないことを示しています。

○最近5期の運用実績

決算期	基準価額 (分配落)	基準価額		東証株価指数 (TOPIX)		株式組入比率	株式先物比率	純資産額
		税金 分配	騰落率	(TOPIX)	騰落率			
	円	円	%	(TOPIX)	%	%	%	百万円
40期(2020年9月10日)	10,258	300	17.5	1,624.86	15.5	96.1	—	1,705
41期(2021年3月10日)	11,534	1,300	25.1	1,919.74	18.1	97.5	—	1,780
42期(2021年9月10日)	12,478	450	12.1	2,091.65	9.0	98.8	—	1,868
43期(2022年3月10日)	10,755	0	△13.8	1,830.03	△12.5	98.2	—	1,583
44期(2022年9月12日)	11,375	300	8.6	1,980.22	8.2	98.5	—	1,636

(注) 基準価額の騰落率は分配金込み。

(注) 東証株価指数 (TOPIX) とは、日本の株式市場を広範に網羅するとともに、投資対象としての機能性を有するマーケット・ベンチマークで、浮動株ベースの時価総額加重方式により算出される株価指数です。TOPIXの指数値及びTOPIXに係る商標又は商標は、株式会社J P X総研又は株式会社J P X総研の関連会社 (以下「J P X」という。) の知的財産であり、指数の算出、指数値の公表、利用などTOPIXに関するすべての権利・ノウハウ及びTOPIXに係る商標又は商標に関するすべての権利はJ P Xが有します。

(注) 当ファンドは親投資信託を組み合わせますので、「株式組入比率」、「株式先物比率」は実質比率を記載しております。

(注) 「株式先物比率」は買建比率－売建比率。

○当期中の基準価額と市況等の推移

年月日	基準価額		東証株価指数 (TOPIX)		株式組入比率	株式先物比率
	騰落率	騰落率	(TOPIX)	騰落率		
(期首) 2022年3月10日	円	%	(TOPIX)	%	%	%
	10,755	—	1,830.03	—	98.2	—
3月末	11,706	8.8	1,946.40	6.4	96.8	—
4月末	11,289	5.0	1,899.62	3.8	97.8	—
5月末	11,371	5.7	1,912.67	4.5	97.6	—
6月末	10,868	1.1	1,870.82	2.2	97.5	—
7月末	11,362	5.6	1,940.31	6.0	98.0	—
8月末	11,572	7.6	1,963.16	7.3	98.3	—
(期末) 2022年9月12日	11,675	8.6	1,980.22	8.2	98.5	—

(注) 期末基準価額は分配金込み、騰落率は期首比。

(注) 当ファンドは親投資信託を組み合わせますので、「株式組入比率」、「株式先物比率」は実質比率を記載しております。

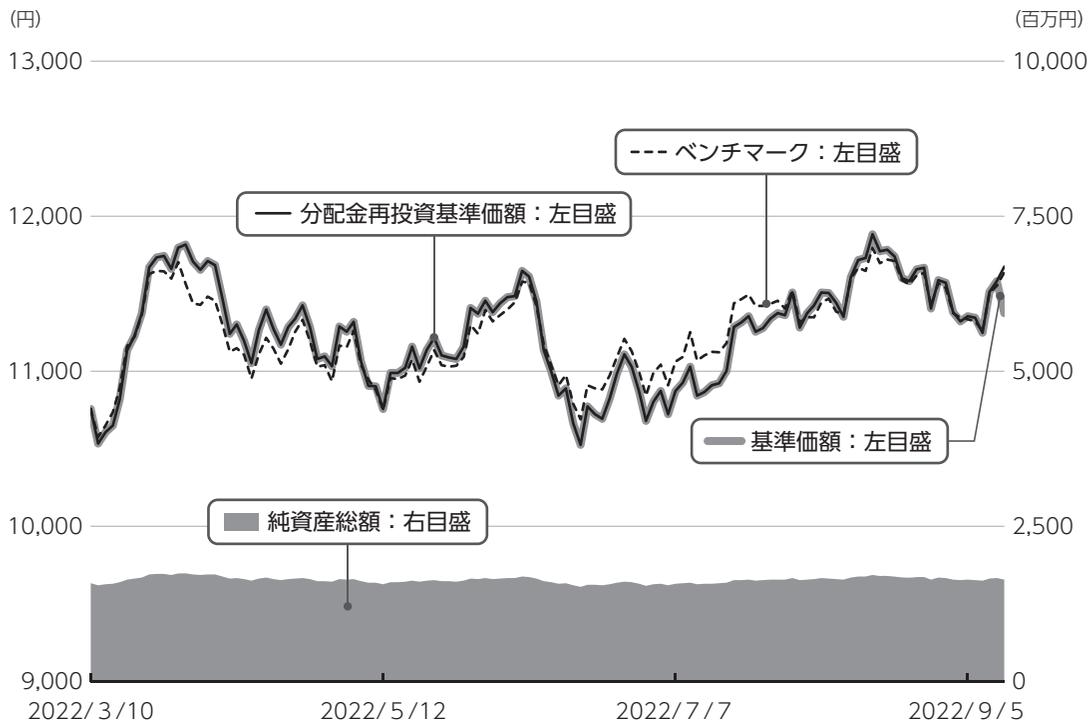
(注) 「株式先物比率」は買建比率－売建比率。

運用経過

第44期：2022年3月11日～2022年9月12日

当期中の基準価額等の推移について

基準価額等の推移



第44期首	10,755円
第44期末	11,375円
既払分配金	300円
騰落率	8.6%
	(分配金再投資ベース)

※分配金再投資基準価額は、分配金が支払われた場合、収益分配金（税込み）を分配時に再投資したものとみなして計算したもので、ファンドの運用の実質的なパフォーマンスを示すものです。

※実際のファンドにおいては、分配金を再投資するかどうかについては、受益者のみなさまがご利用のコースにより異なります。また、ファンドの購入価額により課税条件も異なります。従って、各個人の受益者のみなさまの損益の状況を示すものではない点にご留意ください。

基準価額の動き

基準価額は期首に比べ8.6%（分配金再投資ベース）の上昇となりました。

ベンチマークとの差異

ファンドの騰落率は、ベンチマークの騰落率（8.2%）を0.4%上回りました。

基準価額の主な変動要因**上昇要因**

対米ドルで円安が進行したことなどから国内株式市況が上昇し、バリューマザーファンド（以下、バリューマザー）、グロースマザーファンド（以下、グロースマザー）ともに上昇したことが、基準価額の上昇要因となりました。

下落要因

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて中国が都市封鎖を拡大する可能性が高まり、世界景気の減速やサプライチェーンの混乱への懸念が強まったことなどを背景に国内株式市況が一時的に下落したことなどが、基準価額の一時的な下落要因となりました。

組入ファンド	騰落率	組入比率(対純資産総額)
グロースマザーファンド	6.7%	55.5%
バリューマザーファンド	11.8%	44.2%

第44期：2022年3月11日～2022年9月12日

投資環境について

国内株式市況

国内株式市況は上昇しました。

期首から期末にかけて、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて中国が都市封鎖を拡大する可能性が高まり、世界景気の減速やサプライチェーンの混乱への懸念

が強まったことなどを背景に国内株式市況が調整する局面もありましたが、対米ドルでの円安進行により輸出関連株の業績拡大が期待されたことなどから国内株式市況は上昇しました。

当該投資信託のポートフォリオについて

三菱UFJ スタイルセレクト・ブレンドファンド

期を通じて2つのマザーファンドの合計組入比率を高位で維持しました。

スタイル（グロース、バリュー）の投資配分は、期首は当面の物価が高止まりする中で金利は緩やかな上昇が続くと考えたことなどからバリューをオーバーウェイトとしていました。2022年3月下旬以降は、米国の着実な利上げ実行により今後の景気減速への懸念が強まりつつある中で、金利上昇余地も限定的になりつつあると考えたことから、徐々にバリューのオーバーウェイト比率を縮小する決定をしました。期末時点ではグロースをオーバーウェイトとしています。

“グロース”と“バリュー”への投資配分は、50%ずつを基本とし、ブレンドファンド運用会議により決定します。

期末現在の組入比率は、グロースマザー55.5%、バリューマザー44.2%としています。

▶ グロースマザーファンド

個別銘柄の選別においては、企業が置かれている事業環境、競争力、マネジメント力等に注目し、将来の成長が期待できる企業を中心に投資を行いました。

組入銘柄数は概ね56～60銘柄程度で推移させました。ファンダメンタルズの変化や新規投資候補銘柄との相対比較等を勘案し、適宜銘柄入れ替えを行いました。当期では、ビジョナル、フルキャストホールディングスなど18銘柄を新規に組み入れました。一方、ソフトバンクグループ、三菱瓦斯化学など16銘柄を全株売却しました。

▶ バリューマザーファンド

RUSSELL/NOMURA Total Market Valueインデックスの銘柄群の中から割安と判断される銘柄に厳選して投資することにより、値上がり益の獲得をめざし、銘柄選定を行いました。また、組入銘柄・組入比率は、保有している不動産等の含み損益を考慮した独自の修正株価純資産倍率（PBR）を基にセクター内比較等を行い、その上で、経営陣が保有資産の価値を最大化しようとしているかや

同一業種内における企業の優位性などの定性面の評価などを総合的に考慮して決定しました。

組入銘柄数は64～68銘柄で推移させました。株価水準と企業の競争力や業績の変化などを勘案し、より割安と判断される銘柄への入れ替えを機動的・継続的に行いました。当期では、東洋水産や野村不動産ホールディングスなど7銘柄を新規に組み入れました。また、荏原製作所やAGCなど8銘柄を全株売却しました。

当該投資信託のベンチマークとの差異について

▶ 三菱UFJ スタイルセレクト・ブレンドファンド

ファンドの騰落率は、ベンチマークの騰落率（8.2%）を0.4%上回りました。

資産配分効果はプラスとなり、バリューマザー、グロースマザーがそれぞれアウトパフォームした結果、全体としてはベンチマークを上回りました。

▶ グロースマザーファンド プラス要因

業種配分要因：その他金融業や海運業をベンチマークに対してアンダーウェイトとしていたことがプラスに寄与しました。

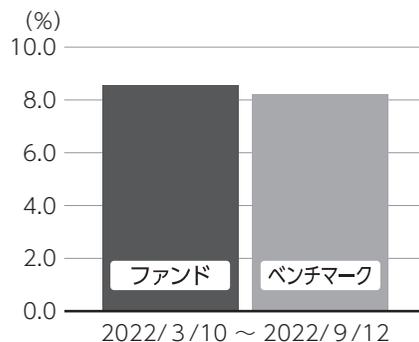
銘柄選択要因：第一三共、Sansanをベンチマークに対してオーバーウェイトとしていたことがプラスに寄与しました。

マイナス要因

業種配分要因：サービス業をベンチマークに対して概ねオーバーウェイトとしていたことや、食料品をベンチマークに対してアンダーウェイトとしていたことがマイナスに影響しました。

銘柄選択要因：マネーフォワード、セプテーニ・ホールディングスをベンチマークに対してオーバーウェイトとしていたことがマイナスに影響しました。

基準価額（ベビーファンド）と ベンチマークの対比（騰落率）



※ファンドの騰落率は分配金込みで計算しています。

▶ バリューマザーファンド

プラス要因

業種配分要因：精密機器をベンチマークに対してオーバーウェイトとしていたことや銀行業をベンチマークに対してアンダーウェイトとしていたことがプラスに寄与しました。

銘柄選択要因：東洋水産、三菱重工業をベンチマークに対して概ねオーバーウェイトとしていたことがプラスに寄与しました。

マイナス要因

業種配分要因：非鉄金属をベンチマークに対してオーバーウェイトとしていたことやゴム製品をベンチマークに対してアンダーウェイトとしていたことがマイナスに影響しました。

銘柄選択要因：ソニーグループ、イビデンをベンチマークに対してオーバーウェイトとしていたことがマイナスに影響しました。

分配金について

収益分配金につきましては、基準価額水準、市況動向、分配対象額の水準等を勘案し、次表の通りとさせていただきます。収益分配に充てなかった利益（留保益）につきましては、信託財産中に留保し、運用の基本方針に基づいて運用します。

分配原資の内訳

(単位：円、1万口当たり、税込み)

項目	第44期
	2022年3月11日～2022年9月12日
当期分配金（対基準価額比率）	300 (2.570%)
当期の収益	130
当期の収益以外	169
翌期繰越分配対象額	2,626

(注) 対基準価額比率は当期分配金（税込み）の期末基準価額（分配金込み）に対する比率であり、ファンドの収益率とは異なります。

(注) 当期の収益、当期の収益以外は小数点以下切捨てで算出しているため合計が当期分配金と一致しない場合があります。

今後の運用方針 (作成対象期間末での見解です。)

▶三菱UFJ スタイルセレクト・ブレンドファンド

ロシアのウクライナ侵攻による地政学的リスクの高まりなどから、株式市場は不安定な状況が継続しています。ロシア・ウクライナ問題は長期化しつつあり、資源価格の上昇に伴う実質所得の目減り、資産価格下落による逆資産効果、供給網の目詰まりなどにより世界経済の下押し圧力となることが懸念され、今後の動向

を引き続き注視します。米国では着実な利上げ実行により今後の景気減速への懸念が強まりつつありますが、金利上昇余地は限定的になりつつあると考えることなどから、スタイルはグロース優位の展開を想定しています。過去においてスタイルは循環していることから、グロースの割安感が生じつつあると考えており、各国の株式、債券、為替市場の今後の展開やPBR面から回復が進みつつある素

材セクター（鉄鋼や鉱業など）などの株価動向を見極めつつ、機動的な投資判断を行う方針です。

▶ グロースマザーファンド

企業の中長期成長性が高いことを重視しています。銘柄選定にあたっては、企業の業績成長の大きなドライバーとなりえる経済の構造的な変化などに留意するとともに、個別企業の事業自体の競争力やマネジメントのクオリティなどに着目します。株価変動によるバリュエーションの水準、中長期的な成長性や事業リスク、流動性などを考慮しながら組入比率の調整や新規銘柄への入れ替えを検討していく方針です。

当面の国内株式市況は、世界的なインフレの動向と中央銀行の金融政策、ロシア・ウクライナ情勢などがエネルギー価格に与える影響など、依然として不透明な状況が継続していることから注視が必要だと認識しており、引き続き変動性の高い展開を想定します。特に米国のインフレ動向とそれに対応した金融政策の方向性については、金融市場に与える影響が大きいため慎重に動向を見極める必要があると考えています。一方で、こうした市況の変動性の高い局面は本来の企業価値から大きく乖離したと思われる株価

形成がなされることも多く、徹底したリサーチにより大きな超過収益をもたらす企業を発掘する有望な機会であると捉えています。このような想定の下、業績を精査し中長期的な成長確度の高い銘柄の発掘に注力し、運用パフォーマンスの向上に努める方針です。

▶ バリューマザーファンド

今後も基本方針に従い、保有している不動産等の含み損益を考慮した独自の修正PBRを基にセクター内比較等を行い、より割安度が強い銘柄を絞り込んだ上で、経営陣が保有資産の価値を最大化しているかや同一業種内における企業の優位性など、取材等を通じた定性面の評価を加え銘柄を選定します。

米国のインフレ率には鈍化の兆しも見られるものの引き続き高水準で推移しており、米国の利上げや量的引き締めのパースについては楽観せずに注視していきます。国内においてもコストアップが顕在化する中、相次ぐ値上げが国内の消費動向に与える影響について今後の動向を見極める必要があるとみています。

こうした変化を見極め、企業の本質的な価値から判断してより割安と判断できる個別銘柄を選択していく方針です。

2022年3月11日～2022年9月12日

1万口当たりの費用明細

項目	当期		項目の概要
	金額 (円)	比率 (%)	
(a) 信託報酬	107	0.953	(a) 信託報酬 = 期中の平均基準価額 × 信託報酬率 × (期中の日数 ÷ 年間日数)
(投 信 会 社)	(50)	(0.448)	ファンドの運用・調査、受託会社への運用指図、基準価額の算出、目論見書等の作成等の対価
(販 売 会 社)	(50)	(0.448)	交付運用報告書等各種書類の送付、顧客口座の管理、購入後の情報提供等の対価
(受 託 会 社)	(6)	(0.056)	ファンドの財産の保管および管理、委託会社からの運用指図の実行等の対価
(b) 売買委託手数料	7	0.058	(b) 売買委託手数料 = 期中の売買委託手数料 ÷ 期中の平均受益権口数 有価証券等の売買時に取引した証券会社等に支払われる手数料
(株 式)	(7)	(0.058)	
(c) その他費用	0	0.001	(c) その他費用 = 期中のその他費用 ÷ 期中の平均受益権口数
(監 査 費 用)	(0)	(0.001)	ファンドの決算時等に監査法人から監査を受けるための費用
合 計	114	1.012	

期中の平均基準価額は、11,251円です。

(注) 期中の費用（消費税等のかかるものは消費税等を含む）は、追加・解約により受益権口数に変動があるため、簡便法により算出した結果です。

(注) 各金額は項目ごとに円未満は四捨五入してあります。

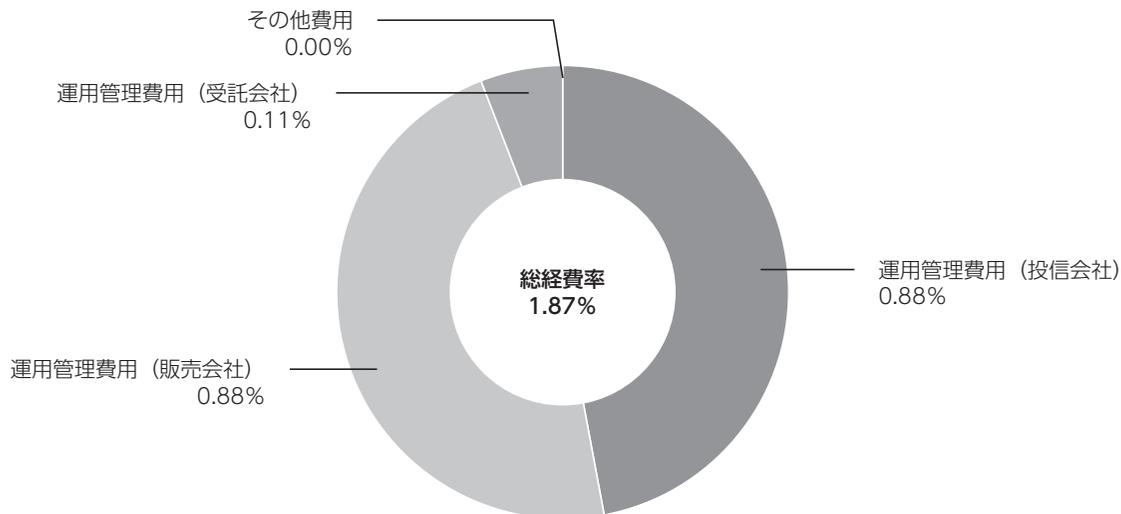
(注) 売買委託手数料およびその他費用は、このファンドが組み入れている親投資信託が支払った金額のうち、当ファンドに対応するものを含みます。

(注) 各比率は1万口当たりのそれぞれの費用金額（円未満の端数を含む）を期中の平均基準価額で除して100を乗じたもので、項目ごとに小数第3位未満は四捨五入してあります。

(参考情報)

■ 総経費率

当期中の運用・管理にかかった費用の総額（原則として、募集手数料、売買委託手数料及び有価証券取引税を除く。）を期中の平均受益権口数に期中の平均基準価額（1口当たり）を乗じた数で除した**総経費率（年率）は1.87%**です。



(注) 費用は、1万口当たりの費用明細において用いた簡便法により算出したものです。

(注) 各費用は、原則として、募集手数料、売買委託手数料及び有価証券取引税を含みません。

(注) 各比率は、年率換算した値です。

(注) 前記の前提条件で算出したものです。このため、これらの値はあくまでも参考であり、実際に発生した費用の比率とは異なります。

○売買及び取引の状況

(2022年3月11日～2022年9月12日)

親投資信託受益証券の設定、解約状況

銘柄	設定		解約	
	口数	金額	口数	金額
	千口	千円	千口	千円
グロースマザーファンド	151,644	220,975	31,876	46,848
バリューマザーファンド	238	850	76,286	271,841

○株式売買比率

(2022年3月11日～2022年9月12日)

株式売買金額の平均組入株式時価総額に対する割合

項目	当期	
	グロースマザーファンド	バリューマザーファンド
(a) 期中の株式売買金額	2,255,214千円	719,045千円
(b) 期中の平均組入株式時価総額	2,155,427千円	1,220,631千円
(c) 売買高比率 (a) / (b)	1.04	0.58

(注) (b)は各月末現在の組入株式時価総額の平均。

○利害関係人との取引状況等

(2022年3月11日～2022年9月12日)

利害関係人との取引状況

<三菱UFJ スタイルセレクト・ブレンドファンド>

該当事項はございません。

<グロースマザーファンド>

区分	買付額等 A			売付額等 C		
	うち利害関係人 との取引状況B	B A	%	うち利害関係人 との取引状況D	D C	%
株式	百万円 1,202	百万円 204	17.0	百万円 1,052	百万円 349	33.2

平均保有割合 38.2%

※平均保有割合とは、親投資信託の残存口数の合計に対する当該ベビーファンドの親投資信託所有口数の割合。

<バリューマザーファンド>

区分	買付額等 A			売付額等 C		
	うち利害関係人 との取引状況B	B A	%	うち利害関係人 との取引状況D	D C	%
株式	百万円 223	百万円 62	27.8	百万円 495	百万円 94	19.0

平均保有割合 64.7%

※平均保有割合とは、親投資信託の残存口数の合計に対する当該ベビーファンドの親投資信託所有口数の割合。

利害関係人の発行する有価証券等

<バリューマザーファンド>

種 類	買 付 額	売 付 額	当 期 末 保 有 額
株式	百万円 -	百万円 6	百万円 27

売買委託手数料総額に対する利害関係人への支払比率

項 目	当 期
売買委託手数料総額 (A)	949千円
うち利害関係人への支払額 (B)	237千円
(B) / (A)	25.0%

(注) 売買委託手数料総額は、このファンドが組み入れている親投資信託が支払った金額のうち、当ファンドに対応するものです。

利害関係人とは、投資信託及び投資法人に関する法律第11条第1項に規定される利害関係人であり、当ファンドに係る利害関係人とは三菱UFJモルガン・スタンレー証券、三菱UFJフィナンシャル・グループ、モルガン・スタンレーMUFJ証券です。

○組入資産の明細

(2022年9月12日現在)

親投資信託残高

銘 柄	期首(前期末)	当 期 末	
	口 数	口 数	評 価 額
	千口	千口	千円
グロースマザーファンド	481,113	600,880	908,591
バリューマザーファンド	272,920	196,872	723,979

○投資信託財産の構成

(2022年9月12日現在)

項 目	当 期 末	
	評 価 額	比 率
	千円	%
グロースマザーファンド	908,591	53.6
バリューマザーファンド	723,979	42.7
コール・ローン等、その他	63,023	3.7
投資信託財産総額	1,695,593	100.0

○資産、負債、元本及び基準価額の状況 (2022年9月12日現在)

項 目	当 期 末
	円
(A) 資産	1,695,593,823
コール・ローン等	19,181,506
グロースマザーファンド(評価額)	908,591,777
バリューマザーファンド(評価額)	723,979,663
未収入金	43,840,877
(B) 負債	59,316,841
未払収益分配金	43,154,628
未払解約金	574,047
未払信託報酬	15,564,403
未払利息	19
その他未払費用	23,744
(C) 純資産総額(A-B)	1,636,276,982
元本	1,438,487,609
次期繰越損益金	197,789,373
(D) 受益権総口数	1,438,487,609口
1万口当たり基準価額(C/D)	11,375円

<注記事項>

- ①期首元本額 1,472,208,614円
 期中追加設定元本額 738,976円
 期中一部解約元本額 34,459,981円
 また、1口当たり純資産額は、期末1.1375円です。

②分配金の計算過程

項 目	2022年3月11日～ 2022年9月12日
費用控除後の配当等収益額	18,824,102円
費用控除後・繰越欠損金補填後の有価証券売買等損益額	-円
収益調整金額	4,148,609円
分配準備積立金額	397,946,657円
当ファンドの分配対象収益額	420,919,368円
1万口当たり収益分配対象額	2,926円
1万口当たり分配金額	300円
収益分配金金額	43,154,628円

○損益の状況 (2022年3月11日～2022年9月12日)

項 目	当 期
	円
(A) 配当等収益	△ 1,218
受取利息	7
支払利息	△ 1,225
(B) 有価証券売買損益	147,739,087
売買益	150,194,703
売買損	△ 2,455,616
(C) 信託報酬等	△ 15,588,147
(D) 当期損益金(A+B+C)	132,149,722
(E) 前期繰越損益金	150,218,142
(F) 追加信託差損益金	△ 41,423,863
(配当等相当額)	(4,148,124)
(売買損益相当額)	(△ 45,571,987)
(G) 計(D+E+F)	240,944,001
(H) 収益分配金	△ 43,154,628
次期繰越損益金(G+H)	197,789,373
追加信託差損益金	△ 41,423,863
(配当等相当額)	(4,148,609)
(売買損益相当額)	(△ 45,572,472)
分配準備積立金	373,616,131
繰越損益金	△134,402,895

- (注) (B)有価証券売買損益は期末の評価換えによるものを含みます。
 (注) (C)信託報酬等には信託報酬に対する消費税等相当額を含めて表示しています。
 (注) (F)追加信託差損益金とあるのは、信託の追加設定の際、追加設定をした価額から元本を差し引いた差額分をいいます。

○分配金のお知らせ

1 万円当たり分配金（税込み）	300円
-----------------	------

◆分配金は決算日から起算して5営業日までにお支払いを開始しております。

◆分配金を再投資される方のお手取分配金は、2022年9月12日現在の基準価額に基づいて、みなさまの口座に繰り入れて再投資いたしました。

◆課税上の取り扱い

- ・分配金は、分配後の基準価額と個々の受益者の個別元本との差により、課税扱いとなる「普通分配金」と、非課税扱いとなる「元本払戻金（特別分配金）」に分かれます。
- ・分配後の基準価額が個別元本と同額または上回る場合は、全額が普通分配金となります。分配後の基準価額が個別元本を下回る場合には、下回る部分の額が元本払戻金（特別分配金）となり、残りの額が普通分配金となります。
- ・元本払戻金（特別分配金）が発生した場合は、分配金発生時に個々の受益者の個別元本から当該元本払戻金（特別分配金）を控除した額が、その後の個々の受益者の個別元本となります。
- ・個人受益者が支払いを受ける収益分配金のうち普通分配金については配当所得として課税され、原則として、20.315%（所得税15%、復興特別所得税0.315%、地方税5%）の税率で源泉徴収（申告不要）されます。確定申告を行い、総合課税・申告分離課税を選択することもできます。
- ・分配時において、外国税控除の適用となった場合には、分配時の税金が上記と異なる場合があります。

※法人受益者に対する課税は異なります。

※課税上の取扱いの詳細については、税務専門家等にご確認されることをお勧めします。

※税法が改正された場合等には、上記内容が変更になることがあります。

※NISAおよびジュニアNISAをご利用の場合、毎年、一定額の範囲で新たに購入した公募株式投資信託などから生じる配当所得および譲渡所得が一定期間非課税となります。

*三菱UFJ国際投信では本資料のほか、当ファンドに関する情報等の開示を行っている場合があります。詳しくは、取り扱い販売会社にお問い合わせいただくか、当社ホームページ (<https://www.am.mufg.jp/>) をご覧ください。

グロースマザーファンド

《第44期》決算日2022年9月12日

[計算期間：2022年3月11日～2022年9月12日]

「グロースマザーファンド」は、9月12日に第44期の決算を行いました。

以下、法令・諸規則に基づき、当マザーファンドの第44期の運用状況をご報告申し上げます。

運用方針	RUSSELL/NOMURA Total Market Growthインデックスをベンチマークとし、中長期的に同指数を上回る投資成果をめざして運用を行います。わが国の金融商品取引所に上場されている株式および店頭登録株式の中から、将来の成長が期待できる銘柄に投資します。銘柄選定にあたっては、ファンドマネジャーおよび当社アナリストの企業訪問調査をベースにした、企業の定性評価（企業が置かれている事業環境、競争力、マネジメント力等に注目します。）を重視します。株式の組入比率は原則として高位を維持することとします。
主要運用対象	わが国の金融商品取引所に上場されている株式および店頭登録株式を主要投資対象とします。
主な組入制限	株式への投資割合に制限を設けません。 外貨建資産への投資は行いません。

○最近5期の運用実績

決算期	基準価額		RUSSELL/NOMURA Total Market Growthインデックス		株式組入比率	株式先物比率	純資産総額
	期騰	期中率 落	期騰	期中率 落			
	円	%		%	%	%	百万円
40期(2020年9月10日)	12,411	25.5	186.21	21.7	97.4	—	2,331
41期(2021年3月10日)	15,868	27.9	214.08	15.0	97.2	—	2,399
42期(2021年9月10日)	17,916	12.9	240.26	12.2	98.7	—	2,698
43期(2022年3月10日)	14,171	△20.9	195.63	△18.6	97.6	—	2,030
44期(2022年9月12日)	15,121	6.7	207.37	6.0	98.2	—	2,299

(注) RUSSELL/NOMURA Total Market Growthインデックスは、RUSSELL/NOMURA 日本株インデックスを構成するインデックスの一つです。RUSSELL/NOMURA Total Market Growthインデックスは、わが国の全金融商品取引所全上場銘柄の全時価総額（時価総額は全て安定持株控除後）の98%超をカバーするRUSSELL/NOMURA Total Marketインデックスのうち、高修正PBR銘柄により構成されています。RUSSELL/NOMURA 日本株インデックスは、Frank Russell Companyと野村證券株式会社が作成している株価指数で、当該指数の知的財産権およびその他一切の権利は両社に帰属します。なお、両社は、当該指数の正確性、完全性、信頼性、有用性、市場性、商品性および適合性を保証するものではなく、当該指数を用いて運用されるファンドの運用成果等に関して一切責任を負いません。

(注) 「株式先物比率」は買建比率－売建比率。

○当期中の基準価額と市況等の推移

年 月 日	基 準 価 額		RUSSELL/NOMURA Total Market Growthインデックス		株 組 入 比 率	株 先 物 比 率
	騰 落 率	騰 落 率	騰 落 率	騰 落 率		
(期 首) 2022年3月10日	円	%		%	%	%
	14,171	—	195.63	—	97.6	—
3月末	15,507	9.4	208.47	6.6	96.7	—
4月末	14,681	3.6	199.55	2.0	98.1	—
5月末	14,623	3.2	201.33	2.9	97.9	—
6月末	13,628	△3.8	192.14	△1.8	96.7	—
7月末	14,686	3.6	204.29	4.4	97.6	—
8月末	14,891	5.1	204.94	4.8	98.0	—
(期 末) 2022年9月12日						
	15,121	6.7	207.37	6.0	98.2	—

(注) 騰落率は期首比。

(注) 「株式先物比率」は買建比率－売建比率。

○運用経過

●当期中の基準価額等の推移について

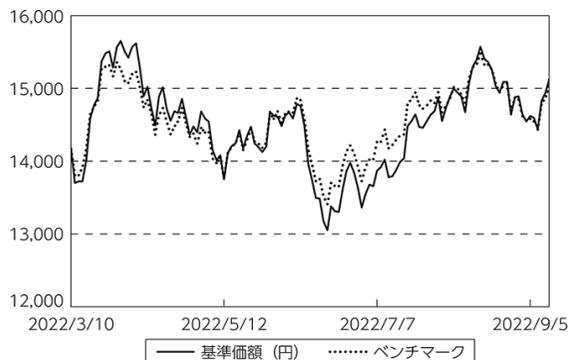
◎基準価額の動き

基準価額は期首に比べ6.7%の上昇となりました。

◎ベンチマークとの差異

ファンドの騰落率は、ベンチマークの騰落率(6.0%)を0.7%上回りました。

基準価額等の推移



(注) ベンチマークは期首の値をファンド基準価額と同一になるよう指数化しています。

●基準価額の主な変動要因

(上昇要因)

ウクライナ情勢への警戒感がやや後退したこと、外国為替市況で円安・米ドル高が進み投資家心理が改善したこと、商品市況が落ち着きを見せインフレへの過度な警戒感が一服したことなどを背景に国内株式市況が上昇したことが、基準価額の上昇要因となりました。

(下落要因)

世界的なインフレの動向や各国中央銀行の金融政策に対する警戒、米金利の急騰や米国景気の先行きへの懸念などを背景に国内株式市況が一時的に下落したことが、基準価額の一時的な下落要因となりました。

(銘柄要因)

上位5銘柄…第一三共、Sansan、ファーストリテイリング、日立製作所、パン・パシフィック・インターナショナルホールディングス

下位5銘柄…東京エレクトロン、マネーフォワード、新光電気工業、ソニーグループ、セプテーニ・ホールディングス

●投資環境について

◎国内株式市況

- ・国内株式市況は上昇しました。
- ・期首から2022年6月中旬にかけては、ウクライナ情勢への警戒感がやや後退したことや、外国為替市況で円安・米ドル高が進み投資家心理が改善したことなどから上昇する局面もあったものの、世界的なインフレの動向と各国中央銀行の金融政策への警戒、米金利の急騰や米国景気の先行きへの不透明感が台頭したことなどから国内株式市況は一進一退の動きとなりました。
- ・6月下旬から期末にかけては、商品市況が落ち着きを見せインフレへの過度な警戒感が一服したことや堅調な国内企業の決算などを背景に上昇しました。

●当該投資信託のポートフォリオについて

- ・個別銘柄の選別においては、企業が置かれている事業環境、競争力、マネジメント力等に注目し、将来の成長が期待できる企業を中心に投資を行いました。
- ・組入銘柄数は概ね56～60銘柄程度で推移させました。ファンダメンタルズの変化や新規投資候補銘柄との相対比較等を勘案し、適宜銘柄入れ替えを行いました。
- ・当期では、ビジョナル、フルキャストホールディングスなど18銘柄を新規に組み入れました。一方、ソフトバンクグループ、三菱瓦斯化学など16銘柄を全株売却しました。

●当該投資信託のベンチマークとの差異について
(プラス要因)

- ・業種配分要因：その他金融業や海運業をベンチマークに対してアンダーウェイトとしていたことがプラスに寄与しました。
- ・銘柄選択要因：第一三共、Sansanをベンチマークに対してオーバーウェイトとしていたことがプラスに寄与しました。

(マイナス要因)

- ・業種配分要因：サービス業をベンチマークに対して概ねオーバーウェイトとしていたことや、食料品をベンチマークに対してアンダーウェイトとしていたことがマイナスに影響しました。
- ・銘柄選択要因：マネーフォワード、セプテーニ・ホールディングスをベンチマークに対してオーバーウェイトとしていたことがマイナスに影響しました。

◎今後の運用方針

- ・企業の中長期成長性が高いことを重視しています。銘柄選定にあたっては、企業の業績成長の大きなドライバーとなりえる経済の構造的な変化などに留意するとともに、個別企業の事業自体の競争力やマネジメントのクオリティなどに着目します。株価変動によるバリュエーションの水準、中長期的な成長性や事業リスク、流動性などを考慮しながら組入比率の調整や新規銘柄への入れ替えを検討していく方針です。
- ・当面の国内株式市況は、世界的なインフレの動向と中央銀行の金融政策、ロシア・ウクライナ情勢などがエネルギー価格に与える影響など、依然として不透明な状況が継続していることから注視が必要だと認識しており、引き続き変動性の高い展開を想定します。特に米国のインフレ動向とそれに対応した金融政策の方向性については、金融市場に与える影響が大きいため慎重に動向を見極める必要があると考えています。一方で、こうした市況の変動性の高い局面は本来の企業価値から大きく乖離したと思われる株価形成がなされることも多く、徹底したリサーチにより大きな超過収益をもたらす企業を発掘する有望な機会であると捉えています。このような想定の下、業績を精査し中長期的な成長確度の高い銘柄の発掘に注力し、運用パフォーマンスの向上に努める方針です。

○1万口当たりの費用明細

(2022年3月11日～2022年9月12日)

項 目	当 期		項 目 の 概 要
	金 額	比 率	
(a) 売 買 委 託 手 数 料 (株 式)	円 11 (11)	% 0.075 (0.075)	(a) 売買委託手数料＝期中の売買委託手数料÷期中の平均受益権口数 有価証券等の売買時に取引した証券会社等に支払われる手数料
合 計	11	0.075	
期中の平均基準価額は、14,503円です。			

(注) 各金額は項目ごとに円未満は四捨五入してあります。

(注) 各比率は1万口当たりのそれぞれの費用金額（円未満の端数を含む）を期中の平均基準価額で除して100を乗じたもので、項目ごとに小数第3位未満は四捨五入してあります。

○売買及び取引の状況

(2022年3月11日～2022年9月12日)

株式

		買 付		売 付	
		株 数	金 額	株 数	金 額
国 内	上場	千株 327	千円 1,202,631	千株 296	千円 1,052,583

(注) 金額は受渡代金。

○株式売買比率

(2022年3月11日～2022年9月12日)

株式売買金額の平均組入株式時価総額に対する割合

項 目	当 期
(a) 期中の株式売買金額	2,255,214千円
(b) 期中の平均組入株式時価総額	2,155,427千円
(c) 売買高比率 (a) / (b)	1.04

(注) (b)は各月末現在の組入株式時価総額の平均。

○利害関係人との取引状況等

(2022年3月11日～2022年9月12日)

利害関係人との取引状況

区 分	買付額等 A	うち利害関係人 との取引状況B	$\frac{B}{A}$ %	売付額等 C	うち利害関係人 との取引状況D	$\frac{D}{C}$ %

売買委託手数料総額に対する利害関係人への支払比率

項 目	当 期
売買委託手数料総額 (A)	1,622千円
うち利害関係人への支払額 (B)	426千円
(B) / (A)	26.3%

利害関係人とは、投資信託及び投資法人に関する法律第11条第1項に規定される利害関係人であり、当ファンドに係る利害関係人とは三菱UFJモルガン・スタンレー証券、モルガン・スタンレーMUFJ証券です。

○組入資産の明細

(2022年9月12日現在)

国内株式

銘柄	期首(前期末)	当 期 末	
	株 数	株 数	評 価 額
	千株	千株	千円
食料品 (1.5%)			
サントリー食品インターナショナル	7.5	6.6	34,122
化学 (7.7%)			
昭和電工	14.6	—	—
三菱瓦斯化学	19	—	—
J S R	5.5	8	25,240
日本ペイントホールディングス	—	12	13,284
富士フイルムホールディングス	4.5	4	28,644
資生堂	7.8	6.5	33,410
デクセラアルズ	10.4	9.5	39,187
ユニ・チャーム	—	7.2	34,646
医薬品 (8.1%)			
日本新薬	2.6	3	22,770
そーせいグループ	11.1	11.1	20,512
第一三共	36.5	32.5	140,042
ガラス・土石製品 (0.8%)			
東海カーボン	17.5	—	—
MARUWA	—	1	17,490
非鉄金属 (—%)			
住友金属鉱山	5.1	—	—
金属製品 (1.3%)			
SUMCO	12.7	15	29,310
機械 (7.0%)			
SMC	0.7	1	68,590
ダイキン工業	1.8	3.2	79,632
ダイフク	0.5	—	—
THK	7.9	—	—
I H I	—	2.5	9,400
電気機器 (25.4%)			
イビデン	9.6	7.6	34,808
日立製作所	7.4	9.2	64,464
富士電機	7.4	11.7	70,083
安川電機	4.3	4.7	22,184
日本電産	6	1.7	16,054
ルネサスエレクトロニクス	23	26	35,022
ソニーグループ	12	10.6	114,056
TDK	3.4	—	—
メイコー	—	2.2	6,644
アドバンテスト	5	2.7	21,330
キーエンス	1.7	2.1	115,479

銘柄	期首(前期末)	当 期 末	
	株 数	株 数	評 価 額
	千株	千株	千円
レーザーテック	0.9	0.2	3,805
村田製作所	2.4	—	—
S C R E E Nホールディングス	1.6	—	—
東京エレクトロン	1.9	1.6	69,520
輸送用機器 (2.4%)			
豊田自動織機	2	—	—
デンソー	4.8	3.1	22,831
川崎重工業	8.6	—	—
トヨタ自動車	—	0.2	414
スズキ	—	5.9	29,753
精密機器 (7.5%)			
テルモ	—	8.1	37,584
オリンパス	10.5	12.8	40,665
HOYA	1.9	3	45,780
朝日インテック	12.2	18	45,396
その他製品 (0.9%)			
SHOEI	—	3.8	21,166
ヤマハ	2.3	—	—
情報・通信業 (18.5%)			
T I S	2.8	—	—
テクマトリックス	—	4	6,760
GMOペイメントゲートウェイ	6.1	4.2	47,082
インターネットイニシアティブ	—	8.3	40,296
マネーフォワード	8.1	2.6	9,269
A p p i e r G r o u p	—	10	13,560
ビジョナル	—	7.1	54,457
ラクスル	—	1	2,375
メルカリ	5.1	1.5	3,360
S a n s a n	28.4	59.5	82,705
Zホールディングス	43.1	30	12,462
日本電信電話	—	5.5	21,791
エヌ・ティ・ティ・データ	24.1	19.5	39,799
スクウェア・エニックス・ホールディングス	1.7	4.9	30,625
コナミグループ	3.9	7.3	53,655
ソフトバンクグループ	8.5	—	—
小売業 (6.5%)			
ネクステージ	—	11	36,190
FOOD & LIFE COMPANIE	5.8	—	—
パン・バシフィック・インターナショナルホ	11.5	20.5	53,402
丸井グループ	8.2	5.7	14,557

銘柄	期首(前期末)	当 期 末	
	株 数	株 数	評 価 額
	千株	千株	千円
ファーストリテイリング	0.9	0.5	42,595
サービス業 (12.4%)			
エムスリー	2.4	4.4	20,253
アウトソーシング	15.8	—	—
セブテーニ・ホールディングス	49.5	50.4	24,595
オリエンタルランド	1.7	1.6	32,272
フルキャストホールディングス	—	16.5	42,289

銘柄	期首(前期末)	当 期 末	
	株 数	株 数	評 価 額
	千株	千株	千円
リクルートホールディングス	11	14.6	67,948
バイカレント・コンサルティング	0.8	1.4	58,660
リログループ	—	15	34,785
合 計	株 数 ・ 金 額	534	565
	銘柄数<比率>	58	60
			<98.2%>

(注) 銘柄欄の()内は、国内株式の評価総額に対する各業種の比率。

(注) 評価額欄の< >内は、純資産総額に対する評価額の比率。

○投資信託財産の構成

(2022年9月12日現在)

項 目	当 期 末	
	評 価 額	比 率
株式	千円 2,259,067	% 96.0
コール・ローン等、その他	95,198	4.0
投資信託財産総額	2,354,265	100.0

○資産、負債、元本及び基準価額の状況 (2022年9月12日現在)

項 目	当 期 末
	円
(A) 資産	2,354,265,810
コール・ローン等	63,688,531
株式(評価額)	2,259,067,800
未収入金	30,499,439
未収配当金	1,010,040
(B) 負債	54,290,118
未払金	29,813,116
未払解約金	24,476,937
未払利息	65
(C) 純資産総額(A-B)	2,299,975,692
元本	1,521,014,082
次期繰越損益金	778,961,610
(D) 受益権総口数	1,521,014,082口
1万口当たり基準価額(C/D)	15,121円

<注記事項>

- ①期首元本額 1,432,552,573円
 期中追加設定元本額 151,918,814円
 期中一部解約元本額 63,457,305円
 また、1口当たり純資産額は、期末15,121円です。

②期末における元本の内訳(当親投資信託を投資対象とする投資信託ごとの元本額)

三菱UFJ スタイルセレクト・グロースファンド	920,133,335円
三菱UFJ スタイルセレクト・ブレンドファンド	600,880,747円
合計	1,521,014,082円

○損益の状況 (2022年3月11日～2022年9月12日)

項 目	当 期
	円
(A) 配当等収益	13,527,183
受取配当金	13,531,351
受取利息	37
その他収益金	26
支払利息	△ 4,231
(B) 有価証券売買損益	127,280,080
売買益	269,506,047
売買損	△142,225,967
(C) 当期損益金(A+B)	140,807,263
(D) 前期繰越損益金	597,479,776
(E) 追加信託差損益金	69,479,656
(F) 解約差損益金	△ 28,805,085
(G) 計(C+D+E+F)	778,961,610
次期繰越損益金(G)	778,961,610

- (注) (B)有価証券売買損益は期末の評価換えによるものを含みます。
 (注) (E)追加信託差損益金とあるのは、信託の追加設定の際、追加設定をした価額から元本を差し引いた差額分をいいます。
 (注) (F)解約差損益金とあるのは、中途解約の際、元本から解約価額を差し引いた差額分をいいます。

バリューマザーファンド

《第44期》決算日2022年9月12日

〔計算期間：2022年3月11日～2022年9月12日〕

「バリューマザーファンド」は、9月12日に第44期の決算を行いました。

以下、法令・諸規則に基づき、当マザーファンドの第44期の運用状況をご報告申し上げます。

運用方針	RUSSELL/NOMURA Total Market Valueインデックスをベンチマークとし、中長期的に同指数を上回る投資成果をめざして運用を行います。わが国の金融商品取引所に上場されている株式および店頭登録株式の中から、株価が割安と判断される銘柄に投資します。銘柄選定にあたっては、配当利回り、PER（株価収益率）、PCFR（株価キャッシュフロー倍率）、PSR（株価売上高倍率）などの様々な指標を用いた定量評価を重視します。株式の組入比率は原則として高位を維持することとします。
主要運用対象	わが国の金融商品取引所に上場されている株式および店頭登録株式を主要投資対象とします。
主な組入制限	株式への投資割合に制限を設けません。外貨建資産への投資は行いません。

○最近5期の運用実績

決算期	基準価額		RUSSELL/NOMURA Total Market Valueインデックス		株式組入比率	株式先物比率	純資産総額
	期騰落	率	期騰落	率			
	円	%		%	%	%	百万円
40期(2020年9月10日)	25,336	14.0	645.63	9.2	99.4	—	1,340
41期(2021年3月10日)	31,313	23.6	781.10	21.0	99.3	—	1,527
42期(2021年9月10日)	35,624	13.8	829.44	6.2	99.3	—	1,422
43期(2022年3月10日)	32,903	△ 7.6	776.30	△ 6.4	99.0	—	1,307
44期(2022年9月12日)	36,774	11.8	857.95	10.5	99.4	—	1,150

(注) RUSSELL/NOMURA Total Market Valueインデックスは、RUSSELL/NOMURA 日本株インデックスを構成するインデックスの一つです。RUSSELL/NOMURA Total Market Valueインデックスは、わが国の全金融商品取引所全上場銘柄の全時価総額（時価総額は全て安定持株控除後）の98%超をカバーするRUSSELL/NOMURA Total Marketインデックスのうち、低修正PBR銘柄により構成されています。

RUSSELL/NOMURA 日本株インデックスは、Frank Russell Companyと野村證券株式会社が作成している株価指数で、当該指数の知的財産権およびその他一切の権利は両社に帰属します。なお、両社は、当該指数の正確性、完全性、信頼性、有用性、市場性、商品性および適合性を保証するものではなく、当該指数を用いて運用されるファンドの運用成果等に関して一切責任を負いません。

(注) 「株式先物比率」は買建比率－売建比率。

○当期中の基準価額と市況等の推移

年 月 日	基 準 価 額		RUSSELL/NOMURA Total Market Valueインデックス		株 組 入 比 率	株 先 物 比 率
	騰 落 率	騰 落 率	騰 落 率	騰 落 率		
(期 首) 2022年 3 月10日	円	%		%	%	%
	32,903	—	776.30	—	99.0	—
3 月末	35,725	8.6	826.15	6.4	97.2	—
4 月末	35,113	6.7	819.35	5.5	97.8	—
5 月末	35,872	9.0	826.38	6.5	97.7	—
6 月末	35,209	7.0	822.54	6.0	98.7	—
7 月末	35,690	8.5	834.95	7.6	98.8	—
8 月末	36,662	11.4	852.10	9.8	99.2	—
(期 末) 2022年 9 月12日	36,774	11.8	857.95	10.5	99.4	—

(注) 騰落率は期首比。

(注) 「株式先物比率」は買建比率－売建比率。

○運用経過

●当期中の基準価額等の推移について

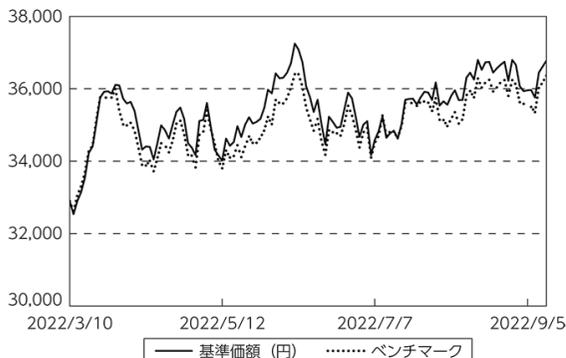
◎基準価額の動き

基準価額は期首に比べ11.8%の上昇となりました。

◎ベンチマークとの差異

ファンドの騰落率は、ベンチマークの騰落率(10.5%)を1.3%上回りました。

基準価額等の推移



(注) ベンチマークは期首の値をファンド基準価額と同一になるよう指数化しています。

●基準価額の主な変動要因

(上昇要因)

米国における利上げペース鈍化への期待が高まったことや、国内企業の2022年4－6月期決算において事前想定を上回る実績が多かったことなどが好感され国内株式市況が上昇したことが、基準価額の上昇要因となりました。

(下落要因)

米国の金融引き締め強化による景気後退懸念などから国内株式市況が一時的に下落したことが、基準価額の一時的な下落要因となりました。

(銘柄要因)

上位5銘柄…三菱重工業、タムロン、日立製作所、日本電信電話、IHI

下位5銘柄…住友金属鉱山、ソニーグループ、Zホールディングス、イビデン、荏原製作所

●投資環境について

◎国内株式市況

- ・国内株式市況は上昇しました。
- ・期首から2022年6月上旬にかけては、ロシア・ウクライナ間の和平交渉の進展に向けた期待が一時高まったことや、対米ドルで円安が進行し、輸出関連株の業績拡大が期待されたことなどから、国内株式市況は上昇しました。
- ・6月中旬から期末にかけては、米国の金融引き締め強化による景気後退懸念などから一時的に下落する局面もありましたが、米国の経済指標でインフレ期待の低下が確認され、米国における利上げペース鈍化への期待が高まったことや、国内企業の2022年4－6月期決算において事前想定を上回る実績が多かったことなどが好感され国内株式市況はおおむね横ばいの動きとなりました。

●当該投資信託のポートフォリオについて

- ・RUSSELL/NOMURA Total Market Valueインデックスの銘柄群の中から割安と判断される銘柄に厳選して投資することにより、値上がり益の獲得をめざし、銘柄選定を行いました。また、組入銘柄・組入比率は、保有している不動産等の含み損益を考慮した独自の修正株価純資産倍率(PBR)を基にセクター内比較等を行い、その上で、経営陣が保有資産の価値を最大化しようとしているかや同一業種内における企業の優位性などの定性面の評価などを総合的に考慮して決定しました。
- ・組入銘柄数は64～68銘柄で推移させました。株価水準と企業の競争力や業績の変化などを勘案し、より割安と判断される銘柄への入れ替えを機動的・継続的に行いました。当期では、東洋水産や野村不動産ホールディングスなど7銘柄を新規に組み入れました。また、荏原製作所やAGCなど8銘柄を全株売却しました。

●当該投資信託のベンチマークとの差異について(プラス要因)

- ・業種配分要因：精密機器をベンチマークに対してオーバーウェイトとしていたことや銀行業をベンチマークに対してアンダーウェイトとしていたことがプラスに寄与しました。
- ・銘柄選択要因：東洋水産、三菱重工業をベンチマークに対して概ねオーバーウェイトとしていたことがプラスに寄与しました。

(マイナス要因)

- ・業種配分要因：非鉄金属をベンチマークに対してオーバーウェイトとしていたことやゴム製品をベンチマークに対してアンダーウェイトとしていたことがマイナスに影響しました。
- ・銘柄選択要因：ソニーグループ、イビデンをベンチマークに対してオーバーウェイトとしていたことがマイナスに影響しました。

◎今後の運用方針

- ・今後も基本方針に従い、保有している不動産等の含み損益を考慮した独自の修正PBRを基にセクター内比較等を行い、より割安度が強い銘柄を絞り込んだ上で、経営陣が保有資産の価値を最大化しているかや同一業種内における企業の優位性など、取材等を通じた定性面の評価を加え銘柄を選定します。
- ・米国のインフレ率には鈍化の兆しも見られるものの引き続き高水準で推移しており、米国の利上げや量的引き締めペースについては楽観せず注視していきます。国内においてもコストアップが顕在化する中、相次ぐ値上げが国内の消費動向に与える影響について今後の動向を見極める必要があるとみています。
- ・こうした変化を見極め、企業の本質的な価値から判断してより割安と判断できる個別銘柄を選択していく方針です。

○1万口当たりの費用明細

(2022年3月11日～2022年9月12日)

項 目	当 期		項 目 の 概 要
	金 額	比 率	
(a) 売 買 委 託 手 数 料 (株 式)	円 15 (15)	% 0.042 (0.042)	(a) 売買委託手数料＝期中の売買委託手数料÷期中の平均受益権口数 有価証券等の売買時に取引した証券会社等に支払われる手数料
合 計	15	0.042	
期中の平均基準価額は、35,418円です。			

(注) 各金額は項目ごとに円未満は四捨五入してあります。

(注) 各比率は1万口当たりのそれぞれの費用金額（円未満の端数を含む）を期中の平均基準価額で除して100を乗じたもので、項目ごとに小数第3位未満は四捨五入してあります。

○売買及び取引の状況

(2022年3月11日～2022年9月12日)

株式

国	上場	買 付		売 付	
		株 数	金 額	株 数	金 額
内		千株	千円	千株	千円
		79	223,681	224	495,364
		(2)	(-)		

(注) 金額は受渡代金。

(注) ()内は株式分割・増資割当および合併等による増減分で、上段の数字には含まれておりません。

○株式売買比率

(2022年3月11日～2022年9月12日)

株式売買金額の平均組入株式時価総額に対する割合

項 目	当 期
(a) 期中の株式売買金額	719,045千円
(b) 期中の平均組入株式時価総額	1,220,631千円
(c) 売買高比率 (a) / (b)	0.58

(注) (b)は各月末現在の組入株式時価総額の平均。

○利害関係人との取引状況等

(2022年3月11日～2022年9月12日)

利害関係人との取引状況

区 分	買付額等 A	うち利害関係人 との取引状況B	$\frac{B}{A}$ %	売付額等 C	うち利害関係人 との取引状況D	$\frac{D}{C}$ %

利害関係人の発行する有価証券等

種 類	買 付 額	売 付 額	当 期 末 保 有 額
株式	百万円 —	百万円 6	百万円 27

売買委託手数料総額に対する利害関係人への支払比率

項 目	当 期
売買委託手数料総額 (A)	527千円
うち利害関係人への支払額 (B)	120千円
(B) / (A)	22.9%

利害関係人とは、投資信託及び投資法人に関する法律第11条第1項に規定される利害関係人であり、当ファンドに係る利害関係人とは三菱UFJモルガン・スタンレー証券、三菱UFJフィナンシャル・グループ、モルガン・スタンレーMUFJ証券です。

○組入資産の明細

(2022年9月12日現在)

国内株式

銘柄	期首(前期末)	当 期 末	
	株 数	株 数	評 価 額
	千株	千株	千円
鉱業 (1.0%)			
INPEX	15.2	7.4	11,048
建設業 (5.3%)			
五洋建設	33	29.3	21,769
ライト工業	10.5	11.1	21,411
積水ハウス	5.8	4.5	11,405
住友電設	3	2.2	5,944
食料品 (6.0%)			
キリンホールディングス	7	5.1	11,426
味の素	11.9	7.4	29,496
東洋水産	—	4.9	28,322
繊維製品 (3.0%)			
東レ	19.4	21.4	17,013
セーレン	9.3	8.1	17,188
化学 (7.5%)			
旭化成	12.6	—	—
日本曹達	2	1.3	5,941
大阪ソーダ	—	2.9	11,295
日本化学工業	2.7	2.7	5,624
三菱瓦斯化学	9.8	5.5	11,605
東京応化工業	2	1.6	10,848
ADEKA	7.9	4.8	11,505
富士フイルムホールディングス	2.7	2.4	17,186
デクセリアルズ	—	2.8	11,550
医薬品 (1.0%)			
協和キリン	4.5	3.6	11,880
石油・石炭製品 (1.0%)			
コスモエネルギーホールディングス	—	2.9	11,527
ガラス・土石製品 (—%)			
AGC	3.8	—	—
東海カーボン	8.7	—	—
鉄鋼 (1.7%)			
日本製鉄	12.5	8.4	19,219
非鉄金属 (3.5%)			
住友金属鉱山	3.2	1.3	5,748
昭和電線ホールディングス	23.7	18.7	34,669
金属製品 (—%)			
LIXIL	5.7	—	—
機械 (4.4%)			
荏原製作所	3.5	—	—

銘柄	期首(前期末)	当 期 末	
	株 数	株 数	評 価 額
	千株	千株	千円
日本ビラー工業	4.7	4.3	11,094
三菱重工業	6.2	4.3	22,403
IHI	7.6	4.4	16,544
電気機器 (9.6%)			
イビデン	2.4	2.6	11,908
日立製作所	5.8	5	35,035
東芝	3	3.4	17,159
日新電機	4.9	3.8	5,468
ルネサスエレクトロニクス	15.2	9	12,123
ソニーグループ	3.4	2.1	22,596
TOA	8.9	7.1	5,715
ローム	1.1	—	—
輸送用機器 (8.5%)			
デンソー	5.8	3.1	22,831
川崎重工業	7.9	8.4	21,688
トヨタ自動車	28.4	22.6	46,782
日産車体	9	7.3	5,876
精密機器 (3.5%)			
ニコン	16.3	10.8	16,329
タムロン	11.2	7.4	23,236
その他製品 (1.5%)			
凸版印刷	8.9	7.6	17,457
電気・ガス業 (3.0%)			
東京瓦斯	10.9	9	23,301
大阪瓦斯	—	4.8	11,068
陸運業 (1.1%)			
京成電鉄	4.1	3.1	12,183
海運業 (1.4%)			
日本郵船	1.4	0.8	8,000
商船三井	1.4	2.3	7,785
空運業 (1.1%)			
日本航空	5.8	4.8	12,480
倉庫・運輸関連業 (—%)			
住友倉庫	6.4	—	—
情報・通信業 (7.2%)			
プロトコーポレーション	5.3	5.3	5,814
Zホールディングス	31.1	—	—
日本電信電話	14.1	11.9	47,147
ソフトバンクグループ	6.3	5.2	29,312

銘柄	期首(前期末)	当 期 末	
	株 数	株 数	評 価 額
	千株	千株	千円
卸売業 (8.5%)			
小野建	4.3	3.9	5,791
メディバルホールディングス	3.1	2.9	5,466
伊藤忠商事	7.1	6	22,998
丸紅	11.1	12.2	17,244
三菱商事	10.3	10.4	45,926
小売業 (3.1%)			
アダストリア	—	5.4	11,831
J. フロント リテイリング	13.4	9.8	11,936
丸井グループ	6	4.7	12,003
銀行業 (3.4%)			
三菱UFJフィナンシャル・グループ	46.1	37.5	27,198
南都銀行	6.4	5.8	11,443
証券、商品先物取引業 (1.0%)			
SBIホールディングス	4.4	4.2	11,453

銘柄	期首(前期末)	当 期 末		
	株 数	株 数	評 価 額	
	千株	千株	千円	
保険業 (5.5%)				
第一生命ホールディングス	18.7	14.3	34,591	
東京海上ホールディングス	2.9	3.6	27,943	
その他金融業 (2.1%)				
オリックス	11.7	10.1	23,548	
不動産業 (2.0%)				
野村不動産ホールディングス	—	6.5	23,400	
サービス業 (3.1%)				
電通グループ	2.9	2.5	10,887	
日本郵政	14	17.5	17,239	
セコム	1.1	0.9	7,909	
合 計	株数・金額	621	478	1,143,780
	銘柄数<比率>	68	67	<99.4%>

(注) 銘柄欄の()内は、国内株式の評価総額に対する各業種の比率。
(注) 評価額欄の< >内は、純資産総額に対する評価額の比率。

○投資信託財産の構成

(2022年9月12日現在)

項 目	当 期 末	
	評 価 額	比 率
株式	千円 1,143,780	% 96.3
コール・ローン等、その他	43,894	3.7
投資信託財産総額	1,187,674	100.0

○資産、負債、元本及び基準価額の状況 (2022年9月12日現在)

項 目	当 期 末
	円
(A) 資産	1,187,674,286
コール・ローン等	43,160,411
株式(評価額)	1,143,780,450
未収配当金	733,425
(B) 負債	37,490,753
未払解約金	37,490,709
未払利息	44
(C) 純資産総額(A-B)	1,150,183,533
元本	312,772,354
次期繰越損益金	837,411,179
(D) 受益権総口数	312,772,354口
1万口当たり基準価額(C/D)	36,774円

<注記事項>

- ①期首元本額 397,529,759円
 期中追加設定元本額 373,961円
 期中一部解約元本額 85,131,366円
 また、1口当たり純資産額は、期末3,6774円です。

②期末における元本の内訳(当親投資信託を投資対象とする投資信託ごとの元本額)

三菱UFJ スタイルセレクト・ブレンドファンド	196,872,699円
三菱UFJ スタイルセレクト・バリューマザーファンド	115,899,655円
合計	312,772,354円

○損益の状況 (2022年3月11日～2022年9月12日)

項 目	当 期
	円
(A) 配当等収益	24,316,750
受取配当金	24,300,464
受取利息	7
その他収益金	17,286
支払利息	△ 1,007
(B) 有価証券売買損益	120,356,996
売買益	145,745,995
売買損	△ 25,388,999
(C) 当期損益金(A+B)	144,673,746
(D) 前期繰越損益金	910,449,107
(E) 追加信託差損益金	959,942
(F) 解約差損益金	△218,671,616
(G) 計(C+D+E+F)	837,411,179
次期繰越損益金(G)	837,411,179

- (注) (B)有価証券売買損益は期末の評価換えによるものを含みます。
 (注) (E)追加信託差損益金とあるのは、信託の追加設定の際、追加設定をした価額から元本を差し引いた差額分をいいます。
 (注) (F)解約差損益金とあるのは、中途解約の際、元本から解約価額を差し引いた差額分をいいます。